
中ボス様の業務日誌

鈴一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中ボス様の業務日誌

【Zコード】

N5056V

【作者名】

鈴一

【あらすじ】

高卒就職4年目。

嫌な上司とオーバーワークでそろそろ鬱がやばい俺、ふじむら いわお藤村市彦は下
つ端会社員。

人生のクーリング・オフを本気で考えるこの頃だったが、なんとこの度昇進しました。

場所は異世界、魔族領土。

役職は中間管理職。上司は魔王様。

ぞくに言つ中ボスである。

・突発的な思いつきなため、不定期更新です。

1：すなわち、十下座

心地よいまどろみ。

通勤中の電車内か、はたまた仕事中の居眠りのような。起きなければいけないのだが抗えない眠気。そんな感じだ。

（ああ…今日は…今日だけは仕事をやせてしまおつか…）

思考も定まってない俺はぼんやりとそう思った。

社会人にあるまじきことだが、たまには大目に見て欲しい。会社に入つて約4年。

嫌味な上司の理不尽な命令を聞きながら朝から晩まで働きっぱなし。有休なんてただの夢だよね、と悟りきった今日このごろ。つらい下つ端生活を送り続け、疲労も纖細な俺の胃もピークだ。休みたい。そろそろ休みたい。

翌日の上司の小言やまわりの事を思ひつと若干くじけるが。

（…おやすみなさい…）

幸せについては不安半分で呟く俺の意識はあつたと、落ちてこやー

『~~~~~』

落ちて…

『~~~~~…』

…俺の眠りを妨げるのは誰だ！－！

急激に浮上する意識。

それが誰かの声によつてもたらされた直覚めだと理解した瞬間、俺は行動を起こしていた。

「申し訳ありませんでした！－！」

寝そべつていた身体を起こし正座。そのまま手の平を床につけると頭をこれでもかといつぱりとさげる。すなわち土下座。

「すみませんすみません！－ちょっとうとうとしてしまつただけなんです！故意に寝ようとかなんて全然思つてません！－さつきまで眞面目に仕事してたんです！」

嘘八百並べながら黒く冷たい大理石の床に、頭をすりつけるよつて謝り続ける。

プライドなんかとつぐの昔に丸めてポイだ。
今リストラされたら・

(……ん？)

大理石の、床？

てつきり職場のデスクでいつのまにか居眠りしてたのだと思つたんだが…。

うちの職場は普通の絨毯がひいてあり、間違つてもこんな高級感をかもしだしてる大理石なんかじやあない。

ではここはどこだ？

ゆるゆるとやつてくる不安。
床と挨拶したままの顔をそろり、とあげる。

そこには一人の人物がいた。

最初に見えたのは焦げ茶色の、何かの革らしい丈夫そうなブーツ。スラックスのようなズボンのうえに膝ほどまであるゆるい服…まるでローブのようなものを着ている。
さらに顔をうえにあげ 絶句した。

男は見た感じ、歳は俺と同じくらいに思えた。
ミルクティーみたいな色の髪に、緑の目。
全体的に優しげな印象を与える顔のパーツだが、なぜか俺と同じように驚きと困惑の表情でこちらを見ている。

硬直した彼の手から魔法使いのような長い棒が、音を立てて床に転がつた。

(が、外人さん?)

それも、コスプレ仕様の。

2・どうでも、異世界

驚愕とか不安をなんとか押し殺した俺は、外人さんの顔から視線をはずす。

目を向けたのは彼の手から転げ落ちた杖だ。

そう、杖。

長さは1メートルよりちょっと長いくらい。

なんの素材かはよくわからないが白く細い筒状で、先端のほうには数センチあるダイヤ型の透明な水晶がついていた。

うむ。シンプルだが品の良い一品。

…って評価してる場合じゃない。

とりあえず状況はわからないが第一印象は大事だ。
いまだ固まっているらしい外人さんに渡そうと、その杖に手をのばし

「……！」

我に返った彼にもの凄い勢いでかつされた。

その勢いに驚いたのは俺だ。

表面上は目を瞬かせてるいる程度だが本当は心臓バツクバクだぞ！
チキンハートなめんな！

そんな俺の抗議の電波が伝わったのか、さらに彼は一步俺から後ずさると少々強い口調でなにやら話しかけてくる。

なにやら、だ。

そり、さつきもそうだったのだが……言葉がわからん。英語ではない。聞いたこともない。

だが彼が怒つて……いや、警戒してるのはよくわかる。
もしかして杖を取られると思った？

……わかつたからと言つて、言葉わからんプラス自身も困惑氣味の俺には弁明すらしないのだが。

伸ばしたままになつてゐる手をなんとなく開いて閉じて。ぐつぱーぐつぱー。

……人間、どうすればいいかわからなくなつたときは硬直するか意味のわからない動作をするかしかないんだな……。

ちょっと遠い目をして現実から目をそらした俺をどう思つたのだろうか。

少しばかり警戒をおさめたらしく彼は、そろりと俺の方へ近づいてくる。

もしかして可哀そうな人だとと思われたんだろうか……第一印象最悪じゃねーか。

近づいてくる彼をまた警戒させないように、ゆっくりと立ち上がつた。

数歩ほどの距離を取つた外人さんを改めて観察してみる。身長は俺と同じぐらいだ。そしてやつぱりコスプレだ。
ついでとばかりに周りを見回す。

室内で、広さは……高校の教室4個分くらいか？

床は大理石の黒一色。大きな窓には厚手の赤いカーテン。微かに零れた日差しから、いまが日中だとわかる。

扉は俺の背後に一つ。黒い木でできた大きなものだ。

部屋の柱や壁にはところどころ精緻な彫り物があり、調度品はないがどこか洋風の屋敷や城みたいなイメージだ。

キョロキョロまわりを観察している俺を、相手も見ていたんだろう。

「……？」

再度言葉をかけられる。

なにかこれは聞いかけているらしいが。やっぱりわからん。
わからないことを伝えるために首を振つたり傾げたりしてみる。
それは理解してくれたらしい。

「……」

丁寧に、俺が問いかける。

今度は相手が首を傾げた。やつぱり日本語は通じないらしい。

（…まいったなこじや…。）

その後。

ちょいちょい、と外人さんに手招きされた俺は部屋を出て彼について行く。

さつき、屋敷だと城みたいだなと思ったが…本当にそういうじゃない

か？

まるで海外の高級ホテルみたいな広い廊下。一体いくつあるんだよ、
って言いたくなるほど多い部屋。

壺とかそういうものはあまりないし華美ではなかつたが、今歩いて
いる廊下でさえいかにも『歴史とか価値がすごいんです』って訴え
てくるオーラがすごい。

…なあ、ほんとビンだよ】】ー。

そんなことを思いつつも今の俺には前を歩きながらときどき振り返
る彼についていくしかできず。

別に逃げやしないよと思ひながら階段を一つ上ると、ちらほらと人
影が見えてくる。さつきの階では人はみかけなかつたな。

第一印象、第一印象。

心の中で復唱しつつ、傍を通り過ぎたお姉さんに会釈。

（うおお…今の人、美人だなあ…。ほんきゅつほん…つて感じの…。
背中から生えたコウモリ羽根なんかやけに似合つてチャーミング…）

友人に情事発動ムツリ助平という不名誉な称号をつけられている
俺である。

内心うはうはしながらもそんなこと顔にもださない。そう、いくら
羽根生えた美人が傍を通りうとも…………え？

（は、羽根…？）

やつぱりコスプレ会場か！？

そういうや通り過ぎる人は微妙にファンタジーな格好をしてる人だつ
たり、耳がとがつてたり、金髪やら赤髪は外人さんだと思つていた
が…青髪ともなると…。

(……うん。コスプレ。コスプレだとも…)

きつとコスプレ大好きな外人たちの集まりにきてしまったんだ
わ。いつじうやってきたかとは置いといて！

(ははは、そうだよな。コスプレに決まってるって…。)

……俺の頭上を何かが通り過ぎた。
見間違えでなければ妖精みたいな羽根の生えた猫だった。
……いや、見間違えだ。きっと。
……こんどは俺の脚元をスライムっぽいなかが通り過ぎたとして
も。それはきっと気のせい。

「…………うん……見間違えじゃねえよ…。」

思わず立ち止り。呟く。

俺より少し前を歩いていた外人さんが振り向いて何か言つてくるが、
ただただ茫然と立ち尽くすしかない。
外人さん……いや、この場合は俺の方が『外人』なんだろうな。

故郷の父さん、母さん。嫌味な上司に、アホな友人たちよ。
どうやら俺は、異世界に来てしまったらしいです。

3・カリスマさん、この対面

なんというかもう、衝撃が大きすぎて放心するしかない…。

俺の人生は一体どこへ向かってるんだ？

たしかに仕事から逃げ出したいとか思つたこともあるが断じて異世界ではない！

そしてくやしいことにこんなイベントの定番セリフが言えていないだと！まあはじめに見えたのは大理石だからこの場合「知らない大理石だ…」だけども。

そんな余裕なかつたけどな。

さて、若干放心してる俺を押したりひいたりしながら頑張つてつれてきてくれた外人さん。『ごめん、ありがとう。』
だいぶ歩いたのでもとの場所からは結構離れているはずだ。
立ち止まつた扉はまわりのものより少し大きくてさらに立派にみえた。

黒い光沢のある木製の扉には葡萄のよつなツタのある植物と、数羽の小鳥が彫られている。

葉脈や羽の一枚一枚が細かく彫られた氣の遠くなる様な細緻なそれをじっくり観察する時間はなく、軽いノックのあと室内にいる誰かと一言一言会話した外人さんはゆっくりと扉を開けた。

部屋に入った外人さんが優雅に一礼。

背後からその様子を見て、この部屋の主は彼の上司もしくは彼より身分が上の者なのだろうと考える。

予想外だつたらしい俺の出現のため、報告にきたのだろうか。
…だとすると心証を良くしたほうがいいよな…どういう対応されるかわからんし。

ないとは思いたいが、不審者あつかいでバツサリなんてやられたら笑えん。

俺は『ここ』がどういう場所なのかまったくわかつてないのだから。

上司さん（仮）に俺を見せるため、前から身体をすらす外人さん。言葉の意味は伝わらないだろうが、挨拶のひとつでもしようと口を開いた俺はそのまま固まつた。

口をあんぐりと開けながら、視界に入つた人物を凝視する。

外人さんのときは比べ物にならない衝撃だ。

ここは異世界。ファンタジー。どんな姿のひとがきても大丈夫なよう心構えはしていたのだが…そんなものは吹つ飛んだ。

目の前にいたのはスライムでも半裸のおねえちゃんでもない。だが予想外だつた。いろんな意味で。

姿は人型だ。

いわゆる人間と違うところといえば、こめかみのあたり…豪奢に波打つ、深い色の赤髪から覗く黒く捩れた左右の角。

ひとりと俺を見つめる黄金の目は、瞳孔が猫のように縦に細い。

見た目は30代半ばに見え、同時にものすごく美形でいらっしゃるのだが…。

カリスマオーラがはんぱじゃない。

なにこれ！？なにこのひと！？

ゆつたりと構えた雰囲気とかガンガン魅了してくる微笑とか俺この人になら抱かれても…よくねーよ！それは嫌だが…！

「へへ？」

ハツ、カリスマさん（名称変更）がなにやら話しかけていらっしゃる。

す、すみません聞いてませんでした…。びっくりひびきぱぱつわからん…。

しょんぼつする俺を見て再度口を開くカリスマさん。

ん。なんかわざの言語と違つた。別の言葉だりつか。

だが…。

「すみません、何を言つてのかわかりません…。」

何も説明できない、聞けないことを再確認。申し訳なさと絶望が胸をしめる。

ああ…まだどつなるんだ。

ほら、カリスマさんなんか少しばかり眉を寄せた表情になつて…。

「君は和国出身か？」

女性だつたら腰がくだけそうなテノールボイスで聞いてきた。

……。
えつ？

「日本語わかるんですか！？」

「二ホン？…和国の言葉ではないのか？」

「俺のいた国が和と呼ばれることもありますけど……。あ、ジャパンとかジャポンとも言われます！」

「それも聞いたことがないようだ。」

言葉が通じた嬉しさでどもる俺とは対照的にゆるやかな口調を崩さない彼は、真っ直ぐこちらを見据えたまま問いかける。

「率直に聞こいつ。『iji』は君がいた場所と同じだとおもつか？」

「…違うとおもいます。俺のいた場所…世界は、貴方達みたいな種族はない。」

「そうか…。」

俺の答えはどうにわかってたんだろう。

一つ頷いた彼はおもむろに椅子から立ち上がる。

その動作さえ隙がなく優雅で「あんたどこの貴族だよ」って内心つっこんだけど、本当に貴族かもしれない。

…つていうか何故俺の田の前に立ち、あまつさえ人差し指を俺のデコに突きつけてるんですか？

も、もしかして始末ですか！？殺されちゃうんですか！？

逃げたいのに恐怖で身体が動かねええ！

「そういうふうな。少し説明しやすくするだけで、君を害そつとは思わない。」

俺の心を読んだかのよつに苦笑される。

なんだ…びびらせないでくれ。俺は庶民なうえにチキンだ。

「だが少しばかり痛む。」

パードゥンー？

「ちよ、ちよっと待つてくれ！一体何を……ッ」

悲鳴に近い俺の抗議は、頭に走った冷たく突き刺さるような痛みに途切れる。

少しばかりとかじやないその痛みに早々と意識を手放す俺は、視界が黒く塗り潰される前に自ら目を閉じた。

4：もじかして、魔王陛下（前書き）

お氣に入り等ありがとうございます！
説明の多い回になります。行き当たづぱつたりで書いているため先
が不安でなりません。
中ボス編が遠い…。

4・もしかして、魔王陛下

キーン、と力キ氷を一気食いしたような冷たい痛みを頭に感じて目を覚ました。

徐々におさまっていく痛みに耐え瞼を開けると、目じりに溜まつていた涙がぽろりと落ちる。

スーツの袖でそれを乱暴に拭つて、何度か瞬いた。
ぼんやりとした視界のなかに映るのはアパートの安っぽい天井ではなく、ベージュのようなやわらかい色合いをしたものだ。

「知らない天…」

「お田覚えですか？」

「俺はテンプレセリフすらまともに言わせてもらひんのかッ」「す、すみません！」

思わずシッコリと口上半身を起こすが、貧血に似た軽いめまいを感じて額を押さえた。

徹夜して出勤した日に似てる。2徹して部活もやっていた高校時代はもはや遠い。

「まだ痛みますか？」

「痛むところがくらぐらする…ね？」

気遣うような声に顔を向けると、そこにはミルクティー色の髪をした男性。

「外人さんじゃないか。」

「外人さん?」

「あ、こ、こいつの話……………てか、言葉……？」

いつのまに流暢な日本語を？

そう言おうとして、気づく。

流暢に話してるのは俺だ。

先ほどまで微塵も理解できなかつた言語を母国語のよつて容易に話していた。

違和感がないでもないが、不思議な出来事（異世界にいる時点で摩訶不思議だ）に若干興奮気味に口を開く。

「うわ…なにこれす！」
「…」

「どうやら問題はなによつですね。」

俺に異常がないことを確認すると、心配していたのか寄せていた眉が下がる。普通にいい人だ。

そして彼は座つていた椅子から立ち上がり、緩やかにお辞儀をした。

「私はリッケン・ハーヴィトン。この城で召喚術師をしております。リッケンとお呼び下さい。」

慌てて俺も寝かされていたソファから立ち上がり、スーツの乱れを軽く整えると挨拶を返す。

「あ、」「丁寧にどうも。俺は、いや私は藤村市彦です。…」
「…」
「吉川様とイチヒロ・フジムラかな。」

「フジムラ様、ですね。どうぞ普段通りにお話ください。」

「えついいやいや様とかいりませんし、そんな丁寧に対応していただかなくとも全然…」

「ではイチヒロ様、と」

様はいらんつちゅー!」。

普段通りに話していくださること言われたので、お言葉に甘えることとする。

ちなみにハーヴィトンさん…いや、リッケンに敬語はやめてくれと言つたのだが「これが普段通りですで」と返されてしまった。あらためて回りを見れば、場所はせつきの部屋のまだ。

執務室なのだろうか、大きめの机が一つ。小さめのが一つ。俺がいるのは机から少し離れて邪魔にならない位置で、休憩スペース、来客用も兼ねていそつたソファとミニテーブルがあった。部屋の両壁の本棚にぎっしりと並んだ書物の世表紙には難しそうなタイトルが並んでいる。

もちろん日本語ではない。どうやら文字も読めるようだ。なんて便利な。

部屋から出でていったのか、カリスマさんは見えなかつた。

対面するようにソファにすわると、用意されていたお茶（紅茶に非常によく似てゐる）を一口呑んで口を濡らせる。

「いろいろ聞きたいことが多いうが…言葉が通じるのはせつきの…魔法?のおかげなのか?」

「はい、そうですね。正確にいえば魔法ではなく魔術ですが。」

違いがよくわからん。

「便利なのだな。」

「そうですね。ですが先ほどの術は使える者も使われる者も限られてくるのです。魔力を介して直接脳に働きかけるので、術を施すにも高い技術が必要ですし対象も高い耐性や魔力が必要になります。」

なるほど、カリスマさんはかなりの腕つてことか。しかし…

「…俺魔力なんかないけど…」

「いいえ、イチヒ様は高い魔力をお持ちです。そうでなければ先程の術で…あ、いえ、なんでもありません。」

あいいいいいー！どうして口ごもる！田をそらす！

失敗してたら何が起こってたんだ！

じつとりとした俺の視線をスルーして、説明を続けるリッケン。

「それに、召喚されたのが魔力をもつ証拠です。」

「どういうこと？」

「…………まずは私たちのことから！」説明しなければなりませんね。

私たちは魔を司る種族。つまり魔族というのですが…」

「…………うん……やっぱり魔族だったか。」

「え？」

「あ、いやなんでもない。続けてくれ。」

スライムとかいる時点で人間サイドではないな、とか思つてたわ。

「私たちはもともとこの世界…コーリエラにいる者ではありません。数十年前、故郷となる世界アデイルで他の種族との大規模な世界戦争があり、その結果こちらに移住してきたのです。」

「戦争に負けたのか？」

「いいえ、戦争には勝ちました。ですが長い戦いの結果世界にあつた元素魔力…自分の身体で作る魔力と違い自然界にあるものをいうのですが…それが消費され、元素魔力を生活にも使う我々にとつて普段の暮らしそうままならない状況になってしまったのです。元素魔力は日々自然に溢れるのですが、戦争による自然界の破壊のせ

いか回復力も著しく低下していました。」

「このままそこにいても、いや自分たちがいるから元素魔力は消費するだけで、世界が元通りにならない。だからいつそ元素魔力の豊富な別の世界へ…ってことか。」

「その通りです。新天地となるこのユーリエラを見つけた私達は、移住する者とアデイルに残る者に別れることになりました。いろいろと理由はあるのですが、先住民との無駄な争いをさけるためと、世界の境界移動の負荷に耐えられるのが一定以上の魔力をもつた者だけだった、というのが大きなところですね。」

当時の戦争で魔力の高い人たちが亡くなっていたため、渡ったのは全体からすると少数だったそうな。

全体の人口も減っていたんで残り組の人口も、ほそぼそと暮らせば元素回復にギリギリ支障がない程度だったらしい。

世界を超えるには魔力がいる。だから俺が召喚された=俺には魔力があるってことか。

そういうとなぜかちょっと困ったような苦笑になるリッケン。

「それもですが…その、もともと魔力を高いひとを呼ぶつもりだったのです。それで間違つてでも呼ばれたイチヒコ様はそのひとと同等の魔力があると思われます。」

「呼ぶつて……もしかしてアデイルから?」

「はい。」

「そりやまたどうして」

「戦争のために。」

「戦争！？移住したこっちでも戦争をしているのかー？」

戻つてもツライ生活だし、異世界にいてもいいなー、とかチラチラ思つてた俺が馬鹿だつた！

戦争とか死亡フラグでしかない。今すぐ戻してもうつよいに頼まねば！

「あ、勘違いしないで下さいね？私たちが侵略しているのではなくあくまで防衛です。」

慌てたように弁解するリッケンに、とりあえず俺も落ちつこうとする。見た目だけは。

「もともとヨーロッパにいた人と友好関係を築けなかつたとか？」
「いいえ、なんどか衝突はありましたが昔は友好的でした。我々も無駄に脅かすことをしてないように、移転先は先住民の文化の中心だった西大陸ではなくほとんど未開拓だった東大陸に居を構えましたし、魔力というものの知識と技術を授けたのは私たちです。」

魔力がある、使えるから魔族ってわけじゃないのか……あ、それだと俺も魔族だわな。

「ですが、百年ほど前から人間の間で魔族を悪魔とし、邪惡なものとする宗教ができたようで……それでも嫌惡される程度だったのですがここ数十年軍を率いて国境を勝手に越えるわ、武力をもたない町や村を襲うわで……本当に困っているのです。」

「宗教か……俺の世界でも昔あつたらしくよ。」

「どこの世界も同じなんですね……。ああ、人間の国全部がこちらを敵としているわけではありませんよ。」

あくまでその宗教を掲げる国々、個人のほかは、敵対はしなくとも皆傍観姿勢らしい。

友好的な国はごく一部。

たしかにへたに仲良くして回りの国に叩かれたくないよな。

人間たちの国同士でも戦争していくといふはあるんだそうだし……。

「最近さうに激しくなった彼らの行動に、国境や街の警備や、軍を拡大しようとかアーティルから人員を借りるつもりだったのですが……。」

「なぜか俺がきてしまった……と……。」

「はい……本当に申し訳ありません。呼びかけに『応え』が返ってきたときなんか違和感は感じたのですが。」

「いや、なんか反射的に応えたっぽい俺も悪かつたよ。うん。それで、俺は帰れるのか、帰れないのか？」

「……可能性は極めて薄いです。」

リックンが申し訳なさそうに手をふせた。

まあ最初にそれを言わなかつたことでだいたい察しはついていたけど……。

「いや、薄いどじりかないだろ？ な。」

「うおおー！？」

唐突に横から聞こえた声に比喩ではなくソファから飛び上がる。
激しく脈打つ胸を片手で押さえつつ視線を向ければ、そこには波打つ赤毛の……カリスマさんだ。

あんたいつ、どうやつて入つてきた！？

ドアの開く音しなかつたぞ！！

ほら、リックンも驚いたみたいに立ちあがつて……丁寧に一礼。

「陛下。」

そうカリスマさんを呼ぶ。

……陛下？

「…………あの……へ、陛下って……王様……だよな……。」

ギギギギ、と油を差していないロボットのよひながこじなに動きで
リッケンの方を見る。

「はい、私たちがお仕えする魔王陛下です。」

リッケンたちの王。
つまり魔族の王…………つてことなんだ。

「もしかして…………魔王陛下で……アラセラレマスカ……？」
「如何にも私は、魔国ラグノヴァが王……、魔王シェルカ・ウイグ・
ファフノイアだ。」

ひきつった笑みを浮かべる俺を見て、カリスマさん、いや、魔王様
は笑顔でいいやがつ……おっしゃったのです。

5：やくに書く、中ボス（前書き）

お気に入り等ありがとうございます！
不定期更新で申し訳ありません。
話数表記間違えていましたが、
5です。

5：ぞくに言つ、中ボス

魔王。

RPGではいわすと知れたラスボス様。
勇者の敵であり、世界制服だつたりとか闇の化身だつたりとかとき
どき暗い過去をもつてたりとかするアレである。
どちらにせよ『主人公側』からすれば敵であることが多い。

：俺が主人公側なのかどうかは置いといてッ。

いきなりのラスボス名乗り上げで終了のお知らせ気分な俺は、なん
とか自己紹介を終えるとソファーに座れとすすめられた。

俺は座つた。正座で。

座らずに魔王様の横に控えたリツケンからかなり不思議そうな目で
見られたが、つっこまればしなかつた。

リツケンが腕をひとつふりすると、魔王様の前に俺と同じようなティ
ーセットが現れる。

魔法つて便利すぎる、どういう仕組みだよ、とか普通の状態なら思
つてるところだが今の俺は獅子に…いや魔王に睨まれた村民A。
さきほどの「戻る確率低いどころかない」的な不穏発言が気になっ
てはいるが、問えるわけがなくただただお言葉を待つのみである。
俺がぐるぐるチキン思考している間に何度も言葉を交わす魔王様と
リツケン。

「…もしや、『繫がり』が完全に…？」

「ああ、あとかたもなく消滅していた。彼 イチヒコの魔力のせい

なのか、事故ゆえの繫がりの希薄性か…まあ、どちらもだらべ。」

だから俺の魔力ってなに。繫がり？

疑問を浮かべる俺に気づいた魔王様はこっちを見て説明してくれる。

「過去に我らが一族がこの世界にやつてきた移転とは違い、普通、通常の召喚術で呼び出された対象は元の場所に帰れる。いや還される。召喚術者の魔力が切れることがあれば強制的に。それは『繫がり』…糸、とも呼ばれるもので対象と、元の世界が繫がっているからだ。」

「命綱…みたいなものですか？」

「そのとおりだな。対象を一生呼び出した世界に居させるとするなら、その繫がりを切るしかない。元の世界との繫がりがなくなれば強制的に戻されることはない。そして呼ばれた世界で過ぐしていくうちにまた新に世界との繫がりを得る。」

「そうすると、対象の元いた世界に戻れる方法は限られてきます。対象を送りたい世界の情報を詳しく知っている術者がいる場合。アデイルはこれになりますのでここからアデイルには送ることは可能です。もう一つは元いた世界から呼んでもらつ…つまり召喚してもらう」とですね。これは個人的に対象を指定しなければなりませんが…。」

「さつや…繫がりが切れたとかって…。」

おそるおそる、これはリッケンに訪ねたのだが答えたのは魔王様だった。

「世界のすれ違いのような、一瞬のリンクによる召喚、ただでさえ薄かつた繫がりだが召喚時に対象の…つまり君の魔力がそれをかき消してしまった。」

「えっ…? オ、俺そんなことしてな…ツていうかできないですよ…」

？」

対象の魔力の放出は召喚時、無意識に起こる現象らしい。「普通はそれで消えたりはしないほど繋がりは強固なのが」と付け加えられる。

「…イチヒコ様の世界に、イチヒコ様を呼び戻せるような術者はいますか？術はありますか？」

「ない…少なくとも俺は知らない。術や魔力なんて俺の世界ではゲームや作り話でしか出てこないものなんだ。いるのはただの人間だけだ。」

もしかしたら世の中の超能力者やマジシャンのなかにはそういう力をもつてた人もいるのか？

いたとしても召喚なんてたいそれたこと出切るとは思えないし、第一俺の存在なんて知るわけないだろうな。

ああ、俺やっぱ帰れないのか。

ストン、と納得する。

もつと衝撃があるとおもったけど、心にぽっかり穴があいて、そこが少し寂しいだけだ。

うん、少し寂しい。

いい世界かつていわれたら完全にイエスとは答えられないが両親も友人もいる俺の故郷だ。

読みかけの漫画だって、やりかけのゲームだって、ネットの友達だって気になる。

それだけといつてしまえばそれだけだけど、切り捨ててしまうのも躊躇われるもの。

「本当に…申し訳ありません。私が…」
「事故なんだろ？さつきもいつたけど、リッケンが謝りなくつてもいいわ。」

なるべく明るく答えてやる。実際ちよつとだけ落ち込んでるだけで、怒つたりはしないんだ。

うん。いい方向に考えよう。

人生を新しくやりなおせるチャンスだぞ？

そうやって思い、それを告げようとすの俺の言葉よつはやく。

魔王様が言った。

「いや、事故でも」ひらの責任だ。君を巻き込み、元にもどすことができない。君の一生を我々は奪ってしまったも同然だ。」

あらためて、俺のほうを向く。

「謝らせてくれ。…すまなかつた。」

黄金の眼に真撃な色を浮かべ、ゆづくりと頭を下げる彼はあやまつた。一国の王が。それも魔王とかいうララスボスが、一般市民どころか異世界の珍獣である俺に。

階級なんて普段の生活ではまったく関係なさすぎる日本人ではあまり実感はないがそれはすごいことなんだろ？。リッケンなんて田を見張ったあと慌てて机の一度自分も深く頭を下げるし。

俺は、はっと我に返ると「頭を上げてください頼むからー」と悲鳴まじりに叫んだ。

反応が遅れるほどで、俺の心は最終的に一つの思いがしめていたのだ。

つまり、

な、なんていい上司なんだ……！！！

と。

元の世界の俺の上司と比べたら……いや比べるのも失礼だ！
部下の失敗は上司の責任なんて言葉よく聞くけど実際にこんな潔く
頭を下げ、心から謝れる人がどれだけいるだろうか。
魔王でも、なんでも、悪いと思ったときには謝れる。

それは外交問題のないこの場だからできることかも知れないが……。
俺は思ったのだ。こういう上司の下で働きたい、と。
俺の人生で今までこんなにも働きたいとおもつたことがあつただろ
うか。いやない！

だから俺は頭を上げた魔王様が言った内容に驚くと同時に歓喜した。

「人間の国に移りたければ一番安全な国へ。このまま我らの国へ留
まるのであれば衣食住はもちろんできることは最大限にしよう。そ
の間にも、君を元の世界に帰す方法を調べることも忘れない。そし
て……」

これは強制ではない。

だから断つてくれてかまわない、と彼は前置きした。

「私は……君に、私の部下として働いてもらいたい。」

その言葉なぜかリッケンが俺の10倍驚いてた。

「へ、陛下ああ！？悪い冗談はやめてください！」

「私は本気だ。」

魔王様は心外だな、といつよに器用に片眉をあげてみせる。

「ならばなお悪いです！彼は一般人で、しかも異世界の人ですよ！貴方の部下と『う』とは軍に入るといふことですか！？それを…」

「俺にできる」と、ありますか？」

「つて、イチヒノ様…受ける気ですかツ」

ぐわっと効果音が聞こえそうな勢いで振り向かれ、俺は若干上体をそらした。

・絶対、リッケンは怒ると怖いタイプだ。

「軍に下るということは戦争に参加するということです、敵は『人間』ですよ？もしかしたら直接手にかけることもあるかもしれません。」

うん、それはわかってる。

きっと後悔なんて無茶苦茶するし、思つたこと全部現実にできるわけないつて知つてる。血なんて見た日には卒倒するかもしれないしこど『人間』相手つてことは、あまりたいしたことじゃない。

人間とか魔族とかで区切るなら俺は異世界人だ。たしかに異世界の人間ではあるけど…。

対峙したとき、仲間意識は浮かぶだろうか？

少なくとも今の俺は魔族だからって嫌うことも人間だからって庇う意識もない。

それに、

「ぱりと落つこちた世界で、俺を必要としてくれる人がいるっていつのがすごい嬉しい。元の世界では期待されることなんてほとんどなかつたし。あと、俺なんか見なかつたふりで捨て置けばよかつたのに、わざわざ世話をしてくれる貴方たちの力になりたい。」

実際、殺してしまえばよかつたのだ。
それが一番楽な選択肢だつたらうに。
でも彼らはそれをしなかつた。

「俺に…なにかできますか。」

もう一度、俺が問いかける。

真っ直ぐ目を逸らさずにいふと、ふと魔王様の目が微かな驚きとともに笑つた気がした。

「できる。高位魔族と比べても遜色ない、高い魔力がある。頭の回転も悪くない。礼儀もわきまえている。意志も、優しさもある。何より私が期待するのは君は異世界の、それも人間だ。違う観点で物が見れるだろう。」

魔王様はこんどは笑つて言つた。

「君はよい部下になるだろ?。これはまるきり勘だがな。」
「精一杯努力します!」

勢いよく答えた俺を見て、リッケンはため息をついた。
あきらめのため息だつた。

「はあ…本気なんですね…。まあ、人間の国へ行つてその魔力の高さを利用されないかとか、変な実験されないかとは危惧していたので我が国に残つていただくのはありがたいのですが…」

「うお、そうか…そういうこともあるよな。

もしかしたら実験動物エンドだったかもしれないんだ。

「もともと人員不足で人を呼ぶつもりだつたしな。その役職につかせればいい。もちろんはじめの「うちま」の城でござりと学ぶようになります。」

「…では、武官…第六軍上級将官です。直属の部下をまとめの將軍となります。」

「はあ！？ちよつ…ちよつとまつてくれ！上級！？將軍！？下つ端じゃないのか！？」

彼らの爆弾発言に俺は驚きで前のめりになり、ずっと正座スタイルだつたために足がしごれてあやつへンファーから転げ落ちるところだつた。

「魔力だけなら十分つとまるだらうし、ちゃんと補佐もつけるが。」

「そういうのって普通貴族とか軍人学校とか出身じゃないかぎり、兵卒からの叩き上げのイメージなんですが！？」

「もともと上級将官を呼ぶつもりだつたのだが、代わりに出てきた君がなつても文句あるまい。」

「いやあるでしょ！？ぜつたいブーイングでしょ！？」

「君には感覚的にわからんだろうが、魔力の高さとこりのとはそれだ無茶ぶりすぎてなんかほんとに悪の魔王に見えてきたんですけど…」

「君には感覚的にわからんだろうが、魔力の高さとこりのとはそれだ

けで高い役職につける理由になる。あとは人格だが、先ほどもいつたようにこれも問題はない。たしかに上級将官は稀だが……人員不足から、軍人の中には君のように能力や適性があるといきなり高い官位になりそこから勉強していくという場合もあるので、そう気にしてすることはない。この世界の知識さえ学べば変わらんよ。それに後で説明はするが第六軍は少し特殊だからな。……まあ、とりあえずやつてみたまえ。」

「どうやら決定な流れだ。

チラリとワッケンを見れば「諦めてください」という同情に満ちた目でみられた。

「……はあ……わかりました……。ええと、俺の部下とか上司って誰になるんですか？」

「直属はまだ編制中です。指揮権としては直属以外にも、将官……上級将官の下の位です……将官以下への命令権をもっています。軍部としては上級将官より上はありませんのでイチヒコ様の上官にあたるのは陛下になります。実際軍の総括をなされているのは陛下です。」「それってつまり中間管理職……。」

「まあ、そうですね。」

魔族の中間管理職つて…………オイ。

魔族の中間管理職、と聞いて俺の中で一つの単語が浮かび上がる。それはある意味倒されること前提のように聞こえるものだ。

「いや、そんなフラグへし折つてやる。」

俺はこの、事故でたまたま、不幸にも落ちこぼれた世界で生きてやると決めたんだ。

故郷の両親、友人たちよ。
聞いてくれ。

高卒就職4年目。

嫌な上司とオーバーワークでそろそろ胃がやばい俺、藤村市彦は下
つ端会社員。

人生のクーリング・オフを本気で考えるこの頃だったが、なんとこ
の度昇進しました。

場所は異世界、魔族領土。

役職は中間管理職。上司は魔王様。

ぞくに言つ中ボスである。

5：ぞくに言つ、中ボス（後書き）

これで1章は終わりです。

このあと閉話やら別視点を書く予定ですが、予定なのでいきなり2章がはじまるかもしれません。

【ユハナの月12日】

やあ、諸君、みんなの中ボス市彦だよ！
…いやごめん、スルーしてほしい。この日誌をみた誰か。

と、こつても日本語で書いてるから読める人がぎられるだろうな。
こちらでいう和国語が日本語にあたるらしいがどうもマイナー言語
みたいだし。

あ、ユハナの月っていうのはあっちでいう5月にあたる。月は同じ
く12月。ひと月は31日で固定だそうだ。

時間経過やその数え方は地球と同じだ。これで一日が76時間ある
とか1分が42秒とかだつたらどうじよつかとおもった。

さて、人生初（何度もあつてたまるか）の異世界トリップ、しかも
魔族領土にこんにちはした俺ですが、超昇進であれよあれよと中ボ
ス位置になつたようだ。

事故で来た異世界の人間を即登用して、しかも上級だと将軍だと
かちょっと四天王できな位置においちゃうのってどうかとおもう。
魔王様まじ魔王。器がでかいのかいい加減なのかわかりません。
あと中ボスとかすつごい倒されるフラグなんんですけど。

とこりで管理職だつたら業務日誌書かなきやなーとおもつて書いて
るけどこれただの日誌というか日記だよな。
まあいいや。記録になれば。

今日一日はほんといろいろあつた。

電車で通勤中か会社にいたのか…記憶はないがスーツでいるあたり仕事中だったのだろう。

そこをリッケン・ハーヴィトンという爽やか青年の召喚術で呼びだされてしまつた俺。

ほんとリッケンはなんで馬鹿丁寧なうえに様付けて呼ぶんだろうか。罪悪感もあるんだろうが。

まじ尊敬みたいな目でみられても…。魔力が高いだけで尊敬に値するらしいが…俺なにもしてないよ？

そう、どうやら俺にはアニメ小説好きなら誰もが夢見る魔力とやらがあるらしい。

はつきりって全然自覚ないんだが…。

さつき部屋の灯りをつける、壁にあるただの模様のような装置…微量でも魔力を持つてる人が触ると反応して天上についた発光石が蛍光灯並みに光るという仕組み、を触つたら見事に灯りがついた。つてことはやつぱり俺には魔力というものがあるらしい。

ちなみにこの灯り、魔族領土で一般的（魔族で魔力がない人はいないそうな）。

人間の街の一般家庭でも三分の一はこれ。魔力をもつていない人もいるため、貧しい家はカンテラ、それなりの家はあらかじめ魔力をいれて光らせてある発光石買つて、夜になつたらとりつけるそうだ。いちいち買うのは痛い出費だらうなー。

人間でも微量でも魔力がある人がだいたい一つの国で30%ほど。強いものだともつとしばられる。

まあ人間は人口が多いそつだから人数にしたらには多いのかな？

魔力うんぬんは置いとこつ。明日から調べよう。

そうそう、調べるといえどこの世界のこと…勉強しなきゃなあ。

魔王様もしづらーーの城で学べつていつてたし。幸いあのヘッドブレイク（命名）のおかげで字も読める。まずは歴史かなあ……歴史はおもしろそりだよな。小説みたいに読めそう。

そういうや魔王様つて何代目の魔王なんだらう。

あ、あと俺の所属の詳細も明日話してくれるそりだ。

たしか第六軍だつたつけ。

特殊つていつてたけど何かな……。

つは、やべえ……。

大切なこと思い出した。

俺のメガネがない！

俺はいつもやや太い黒フレームのメガネをしている。度は入つてない。視力は悪くはないからだ。

メガネをかけるのは俺の、この初対面でちょっとひかれることが多

い目つきの悪さを和らげるためだ！第一印象大事だよ！

やや釣り目気味、つんつん撥ねた硬そうな短髪、チキンの緊張ゆえ

力の入つた眉間……。

友人の佐々木いわくメガネとつた俺は完全にチョイ悪社員だそうだ。なんだよチョイ悪社員つて。流行らせる気か。

たしか廊下で通り過ぎたスレンダーなエルフ耳お姉さんがメガネしてたんだよな……だからメガネはあるはず。リッケンにきいてみるか……。

うん、今日は寝よう。

このベット俺の血がのよつ質がいいし……おやすみ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5056v/>

中ボス様の業務日誌

2011年10月14日21時53分発行